

『学校の始まり』

日本で最初の学校は、今からおよそ1300年ほど前にできました。

大宝元年（701年）に定められた「大宝令」で「学令」が設けられ、中央に大学1校、国ごとに国学を置きました。また、九州の太宰府には大学と国学の中間的な府学を置きました。ただし、この学校は国や地方の仕事をする役人を養成するもので、貴族の子どもたちだけしか入学できませんでした。

誰でも入学できた学校は、天長5年（828年）に弘法大師（空海）が創立した私立学校で綜芸種智院です。

学校という名称で最初のもは、栃木県足利市に今でも史跡として残っている足利学校です。この学校は、平安時代の初めの頃に創設されたと言われていますが、室町時代の永享4年（1432年）、関東管領上杉憲実が創設したという説が確かなようです。憲実は鎌倉の円覚寺の僧快元を校長として招き、多くの学生を教育したといえます。学校は、その後徳川幕府の保護を受け、明治5年（1872年）まで孔子の教えを中心とした教育が行われました。

江戸時代、教育は盛んになり、さまざまな学校ができました。その代表は藩校と寺小屋です。藩校は各藩が設けたもので、水戸の弘道館や熊本の時習館は有名です。中央には、幕府直轄の昌平黌（しょうへいこう）があり、藩校の指導者（教師）を養成していました。

藩校は武士階級の子どものためのもので、一般庶民は寺小屋に行き「読み・書き・そろばん」を習いました。寺小屋の数は全国に数万あったと言われていますが、通うことができた子どもは限られていました。

明治5年7月に「豊かで充実した生活を一生送るには学問をすることが大切です。その学問をするための学校をつくり、そこに6歳になったら誰も入学しましょう。」との国民へのメッセージが政府から出されました。これを受けて同年8月2日に「学制」を發布したのです。この制度は、フランスやアメリカなどで当時行われていた教育を参考にしたもので、全国を大きく8つに大区分し、それぞれに1つの大学を置き、その大学区分を32に分けて中区分とし、そこに中学校を1つずつ設置し、さらに、1中学校区分を210に分け、そこに小学校を建てるというものです。しかし、学校を建てるには、国がお金を出すのではなく、地域の人々が出すのですから、5万校の小学校が一度にできるはずもなく、しかも当時は小学校でも授業料を納めなくてはならず、全員入学は無理なことでした。また、多くの人が貧しかったため、子どもを学校へ行かせることができなかつたり、入学

したとしても6カ月目には試験があり、落第すると上の学年に進めなくて学校が嫌になり行かなくなってしまふ子どももいたようです。明治6年の調査によると、小学校に就学した子どもは、男子39.9%、女子15.1%という結果でした。その後、授業料の廃止、義務教育の4年から6年への延長、学校の建設などによって、明治40年（1907年）には95%の就学率となりました。明治5年の学制の発布から35年かかってこの数字に至ったことを短いとみるか長いとみるかはさておいて、今から100年以上前に学校制度ができ、ほぼすべての子どもが学校に行くことができるようになったこの制度は世界に誇ることができるものと言えます。

国連ではユネスコが中心となって「国連識字の10年」（2002年～2013年）を定め、すべての子どもたちが学校に通えるようになることや成人女性の識字率の向上を目指すための活動に取り組んできました。未だお金がなくて学校に行けなかったり、働かなければならなかったりして、学校に行けない子どもが1億1300万人もいます。そして、学校に行けずに大人になり、文字の読み書きができない人が8億6000万人もいるそうです。

今の時代であっても世界の中には、学校に行くことを夢みる子どもたちが大勢います。また、読み書きができずに、知りたいことを知ることができなかったり、本来持ち備えている能力や可能性を伸ばすことができずじまいといった人たちが世界の人口のおよそ1割近くもいます。改めて誰もが学校に通うことができる状況にあるということは幸せなことかと考えさせられます。